明治期の来日外国人の日本観（一）

針生清人

一

近年、日本についての関心が高まっているといわれ、多くの日本論が刊行されており、それについては『世界の日本人観・日本学総解説』（81年版、自由国民社）のような便利なものもできている。それと関わって海外での日本研究、いわゆるヤパノロギー、も隆盛であり、『海外日本研究要覧』（89年版、福岡ユネスコ協会）には、海外の日本文化研究所について41ヵ国二七六機関が収録されているところである。これらの日本研究には日本の伝統思想を探ぐる上での国学や神道の研究、宗教家の研究なども含まれてはいるが、何よりも日本がいわゆる経済大国となった秘密、非西欧国で唯一、近代化に成功した秘密、は何かを探ぐるもの、また、経済大国とはなったものの仲々世界に対して市場開放を行ない得ぬ、旧態依然たる政治、経済、社会の体質を問うものが多いようである。今日、東アジアの経済発展の著しさに鑑みその文化的背景を探ぐる中で、大乗仏教、儒教、老荘思想、家族観の現代的意義が問われ、日本の果す役割の大きさが指摘されてもいる。(1) しかし、難民受け入れ、外国人労働者の雇用問題、市場開放問題、経済援助等々の処理の仕方の堅苦しさ、ぎこちなさから、これらの問題を全部ひっくるめて、日本の社会構造、政治体制、果ては日本人の体質までが問われている。この問い方を概観するとき、国際的諸関係に向けての日本の開らかれ方が問われているとも思われる。いうならば、日本の現代版「開国」が問題とされているともいえよう。

しかしここに見られる日本論、日本人論は、何れにしても日本との関係の遠近、強弱、あるいは論者の拠る立場、関心から理解も異なり、実に千差万別である。論述の仕方も国際比較を通して日本を診断するというスタイルのものもあれば、西洋とは全く異なる異文化日本を強調して非開放性を糾弾するものもあり、正鵠を射ていると思うものもあれば、興味本位のものもあるところである。しかし今日見られる日本・日本人論は単なる紹介ではなく、国際関係の中にありながらなお本音をはかぬ日本の「無気味さ」に迫ろうとするものが多いようである。それはかって、微笑をたやさぬ日本人の顔の裏面に怒りや悲しみを隠しきっていること、あるいは逆に

どのようなことに直面しても何ら動揺を示さずさながら能面のような表情をしていること、などが指摘されていたことと本質的には変化はないように思われる。

かつて日本が迫られた「開国」とは単に閉鎖的な体制を解体するだけでなく、それ以上に国際的諸関係の中に入ること、あるいは国際的諸関係を自由に取り入れること、を意味していたといえる。従って「開国」とは旧来の諸制度、習俗、その他一切のものを著るしく動揺、変化させるが、そうすることが「文明」の名に恥じぬことだとされた。今日も、開国＝閉鎖的体制の変革の要求は内部から自発的になされるのではなく、常に外部の圧力によってなされることである。それは国際社会への参加のための新しい枠組みとして「文明の成熟」をあげつつ、様々な日本・日本人論を提供するという形をとることに注意し得る。

第一回の開国要求は明治維新以降の国内諸秩序の改変と、国際社会参加のための富国強兵を国策の第一に置いているが、軍事的な突出のために国際社会から孤立し、一種の鎖国状態に陥る。それを受けての第二回の開国要求ともいうべきことは第二次大戦後の国内諸制度を民主化へ向けるための改編要求であり、国際的には非武装中立による国際社会への参加の要求であるが、経済的突出のために露呈してくる日本的特殊性、しかもそれによって経済大国、技術先進国への道が達成されたことに対する様々な形で行なわれるジャパン・バッシング。いうならば、これが現在の第三回の開国要求＝経済市場の開放要求に端的に見られる状況であろう。そして、各々の時期に、多くの日本論が現れていることに気づくところである。そのような形でなされる日本論の現れ方の原型は、もとより第一回の開国要求がなされた維新前後にあり、そこでの日本論は日本訪問、滞在を実際に体験をしたところの「日記」、「見聞記」という性格が顕著であるが、今それを見直すことは現在の日本論の根底にある問題点を理解する上でも必要かつ重要と思われる。先ず、維新時に来日した外国人とはどのようなものであったかを見てみよう。

二

維新前後に日本訪問をし滞在した外国人は、当初は外交官、武官が多かったが、次第に貿易商人、宣教師、（お雇い）教師、観光旅行者、留学生に拡大されている。その来日目的に応じて滞在期間も、来日回数も様々である。「商人は一財産をつくりにやって来る。天命に従ってやって来た宣教師は献身と犠牲の生活に内的な満足を覚え、勇気づけられる。が、外交官や領事は、黄金の誘惑にかられて来たのでも、伝道者や殉教者に約束された永遠の褒賞に希望をかけて来たのでもない。…義務感だけが彼らをこの危険な地位につなぎ止めている」[2]といわれるように様々であり、彼らの来日目的から明治日本を見る目も滞在期間も異なっている。また、日本見聞の範囲も当初の条約開港地およびその周辺から次第に広がり、開港可能地の調査、観光のため、蝦夷、琉球へと足をのばしてほぼ日本一周をするものもいた。

それらの日本見聞、滞在の印象を述べたものには、開国後の日本が後に辿り、我々が今日つき当る問題が、すでに先取りされていることに気づく。明治維新を敢行したのは「神権思想の感化を受けた武士たち」であり、このような神権思想や英雄思想の「持ち主が〈開国進取〉を唱えたのだか

ら、その開国進取が何を意味するかは、あらためて問うまでもない[3]」といわれ、また「日本の貿易競争はどうなのか。日本は世界の競争の中に入っていかなければならないので、これは避けられないことだ。日本の地理的な位置、その人口密度、その領土の限られていることなど、すべて日本が貿易と工業への道に進むべきことを示している[4]」と述べ、その後の日本が殖産興業、アジアへの進出を十分に予測しているところである。また、開国は「独立維持のため、この国を西欧化することを至上命令」とすることであり、「旧来の秩序は新規の秩序に道をゆずった」ところであるが、「国民固有の模倣と同化の力が偉大な日本でさえ、一世代の間に、すべての物質的、精神的、社会的事柄を完全に変質させることはできなかった。…まだ日本の性格は保存され[5]」たままだといわれることは、今日、西側の一員を自称するほどに、しかるべき国際的地位を得てはいるが、経済摩擦の原因に、談合、酒席を介しての取引等、日本特殊の経済慣行に入りこめぬところから、当の西側諸国によって異質の社会、文化構造が指摘されることと無縁ではない。

幕末から維新にかけての激動期をもたらす諸事件に、開国を要求する側を代表して、直接に関与し、当時の日本の政情を報告したものに、ヒュースケン『日本日記』、オールコック『大君の都—幕末日本滞在記』、サトウ『一外交官の見た明治維新』など、ドキュメントとして秀れたものが多いが、それらは外交官として要求した開国が結果的には日本に近代化＝社会革命をもたらすこと、そうすることが文明的であり、そのためには封建体制を打破して新しい政治秩序が成立せねばならぬことなどを共通認識としており、その折々に、日本人の生活風習、社会制度、日本人の気質、人物評などを伝え残している。しかし、彼らの日本理解の根底には、例えば、「礼儀の競争[6]」と呼ぶような、お辞儀の繰り返えしに見られる日本作法の形式性に対する驚き、「食物としては米の飯と魚肉よりもよいもののない日本の家に泊まって、床の上に敷いた日本の蒲団で一夜を過ごすなどということは考えるだけでゾッとした[7]」というような生活慣習上の異和感も確実にある。前後三回（1862—1869, 1870—1883, 1895—1900）、およそ二五年の長きにわたって日本に滞在し、日本語に習熟したばかりでなく、歴史、宗教、風俗を徹底的に研究し、日本文化の良き紹介者となり、日英同盟の推進をはかった日英外交上、多大の親日家ぶりを示したサトウ（Ernest Mason Satow. 1843—1929）ですら、日本に心をひかれ始めたその最初は「ローレンス・オリファントの書いた『エルギン卿のシナ、日本への使節記』というおもしろい、…絵草紙ぶう[8]」の本によってであった。

「その国では、空がいつも青く、太陽が絶え間なくかがやいている。岩石の築山のある小さな庭に面し、障子をひらけばすぐに地面におりられる座敷に寝そべりながら、バラ色の唇と黒い瞳の、しとやかな乙女たちにかしずかれることだけが男の勤めでもあると言ったような—つまり、この世ながらのお伽の国[9]」という空想的なイメージがサトウの日本観の基底にある。「お伽の国」とまではいわぬにしても、その後の日本見聞記の記述にはこれと同様な視点からの描写があって自然である。しかし、現実の日本で彼ら外国人が散見したことはどのようなことだったのであろうか。

「外国の商人が取引きの相手にしなければならなかったのは、主として無資本の、そして商売に無知な山師連中で…契約の破棄や詐欺は、決して珍らしいことではなかった。…日本の商人も、往々同様な手段で相手に返

報されたが、不正行為を差引きすれば日本の方がはるかに大きかった。そんなわけで、…両者の親善感情などは、あり得べくもなかった[10]」という現実認識がある。そのような現実から外国人の間には、「日本人と不正直な取引者とは同意義である」という確信が強くなったとか、「輸入税の脱税を計ろうとする外国人に対して多額の賄賂を要求」する税関吏の堕落ぶりなどが述べられるが、外国商人の悪辣ぶり、あるいは外国人外交官の強腕ぶり、「ヨーロッパの掃溜め」といわれた横浜外国人社会の悪徳ぶり、についての反省、批判等は当初ほとんどない。

三

外国人商人が日常的に、直接に交渉をもった商人の駆け引きぶりを見て、その商人像を直ちに日本人像に重ね合わせる日本人理解ができあがるところである。日本人は他の人種に比べて「盗人根性は少ない。しかしいかさま師なのである。卑俗な言い方をすれば『ぺてん師』なのである」。その理由は「我々に日本の製品を売りつけることで、巧みに我々をだますのである。……日本人はと言えば必要以上に商品を売りつけようとし、しかもその上に、わざと目方、量、質などについてごまかすのである。つまり不正をするのであり、老練な偽造者なのである」という商人像に由来する。しかもこのような商人像に基づく日本人像は日本人の体質にまで言及して補強されるところである。たとえば、日本人が痛みについての「神経感覚が……西洋人とでは異なっている」のであり、「要するに神経の問題」であるというように、「人種的な異い」に根拠を求めている。また、日本人は「人類の中でも見事に本音を言わない（嘘つきな）国民の一つなのである。日本人はシナの嘘を、何か偽善なもので洗練させた[11]」というものである。「本音を言わない」ことが直ちに快楽に対しての「嘘つき」となり、その故に「ぺてん師」といわれるのである。このような奇妙な、偏見に基づく粗雑な日本・日本人理解は枚挙にいとまがない。日本人は、散歩をする時、他人を「左側」に歩かせるのは左側を上位とするから。キモノの上にハカマをはく。土台も出来ぬうちから、大工は屋根をつくる。最初に脱ぐのは帽子ではなく、靴をぬぐ。悲しみの色は黒い着物ではなく白い着物であり、葬式では泣くよりも笑うことが多い。本はおしまいの方から始まり、右から左に書いたり読んだりする、また横ではなく縦に読んだり書いたりもする。吊り目である。思考形式が違う。

また、日本人は初めにそう見えたものと違っている。

どの日本人も謎である。日本人は公の場では一つの役割を果しているのである。しかし舞台裏では全く別人なのだ。日本人というのは偽装の達人で、何世紀にもわたる並外れた習慣で巧妙に身につけた抑制力を持っている。日本人の顔から、心の深いところで考えていることを読みとることは不可能である。日本人は言葉でも本当のところを漏らさない。

日本のやり方は間接的だ。万事において間の手続が重要である。日本人の批評は率直ではなく、ほかの言葉で色々に言い換えてあるし、質問は直接向けられない。日本人は生まれながらの外交官である[12]。

何れにしても日本人の「心の中は全然違う[13]」ということにつきるという訳である。このようにしてヨーロッパと日本の差は文明の程度ではなく、異質の習俗、価値観、思考様式等から全く正反対のものと見なされるのである。

「彼らは、いかにも無邪気そうな無関心のうわべの下に、慎重さを隠くのを好む[14]」。

「無邪気で無害な子供という面は、日本人の第二の天性となった。しかし、……お面の後ろには、普通何か全く違うものが隠くれている」「日本人はうそつきだと、しばしば批判される。日本ではLüge（嘘）は道徳上の欠点とすら見られないし、感じられない。しかも日本語には道徳的欠陥としてのLüge（嘘）に当たる言葉が欠けている[15]」。

「日本人も、この国の火山と同じで、測り知れぬところがある[16]」。

「彼らは、細かく、繊細な、抜け目のない精神を持っている。しかし、ヨーロッパの人種の力を作り出している、あの洞察力、あの視野の広さ、あの創造力は、確かに持ち合わせてはいないのである。このような彼らの知的状態は、文明の劣等というよりは、人種の劣等性に因ありとせねばならないようである」「日本は、今のこの時代にヨーロッパが生み出してきたように、哲学的な思索的な人間を生み出すことが出来るなどと主張するのは馬鹿げてもいよう[17]」。

「この『ふざけた国』で毎日逆さまの現象に出喰している[18]」。

もちろん、以上のような日本人理解に全てがつきるわけでなく、外国人と日本人の間に生ずる異和感、わだかまりは風俗、思想の違いに求め、日本研究を積極的にすすめるべきことを説くものもいる[19]。しかし多くは、維新開国へのプロセスや印象の強かった出来事、特に外国人殺傷事件、を記録することに多くの紙数をさくが、その世界史的意義、国際的環境の中に日本を位置づけるような分析はない。頻発する攘夷浪士等の外国人殺傷事件や政府要人暗殺事件等についても、古来からの武士の有する世界観と野蛮な風習の故であって、この時期の政治革命への意志の特殊な表現というような面については全く考えられていない。これらの諸点については、その後に続く多くの日本滞在記、見聞記においてもほぼ同様である。当時の外国人のそれと同様な見方・感覚で以って現在の日本人は外国、特に東南アジアを見てはいないだろうか。

四

日本は、「ヨーロッパにとってみれば新しい国、ごく最近になって諸外国に門を開き、初期に訪れた人々の物語ることによってのみ知られる国だった。……語り手たちは発達した文明、特異な政治機構、ヨーロッパ中世の封建性を思わせる社会形態を決まって口にするのだった[20]」といわれるように、鎖国日本は突如として、「西洋諸国との交際や競争に明け暮れする騒動と混乱の世界の中へ突入したため、行きずりの旅行者の眼にはこの国の繁栄の基礎となっているものが本当は何なのか、よく理解できないという傾向を生じている[21]」し、「多くの来日西洋人は国内旅行の制限もあるためにきわめて限られた行動半径での見聞と情報によって日本ないし日本人論を構築していった[22]」のであり、「この国は、殆んど完全な鎖国状態から脱して、観察者の前にしばしば理解不能な光景を見せているのである。それ故、日本の目下の状況を真剣に学びたいと思う外国人は、初めは克服できないように思われる困難に出会う[23]」のである。そのため、外国人が日本のことを書く場合、「群盲象をなでる」のと全く同様なことがあてはまるのである。

日本を調べようとする願望の障害となっているものには、公文書の入手

の不可能、知識階級との親交の欠除、外国人に対し現に起っていることを何かにつけて隠くそうとする生来の性癖などが挙げられている。このような制約された条件のもとでは、日本理解も表面的に流れ、誤解や独断に満ちたものにならざるを得ない。何れにしても、「日本の存在は一二九八年以来、ヨーロッパでは知られていたが、当時にあっては地理学上の知識が貧弱であったために、多くの人は日本をお伽ぎの国ぐらいにしか考えていなかった[24]」のであるから、「語られることはおしなべて、まったく新しい……世界にいきなり運ばれてきて感じたさまざまなことをすべて語りつくせてはいない[25]」ということも理解しておかねばならぬところである。

五

西洋に学びながら近代化への道を歩み始める日本にとっては、西洋人は全て何らかの意味で教師の役割を果し、功献するところ大であったといえよう。しかし、中には近代化を急ぐ日本の足もとを見る者がいなかったわけではない。確かに、秀れた指導者の役割を誠実に果した者もいるが、その背後には多くの貪欲なまでに日本をむさぼるものもいたのである。そして日本商人のずるさのみを口にはするが、一方的に一攫千金の夢を果たし財産を作りあげる外国商人の成功ぶりがなお多くの外国人を日本に引き寄せたところである。

元来、日本はヨーロッパにとって未知の国であり、日本についての旅行記や布教者の書簡などによって知られるだけであった。それらは「徒然にまかせて……読まれてきたに過ぎ」ず、「幾人かの学者以外にだれも、……たいして気にはしなかった……極東の物質上の関心がわれわれの関心とは完全に離れていた」が、この物質上の関心から「ヨーロッパが極東に寄せる関心は、ここ数年来、奇妙と思われる程に増大してきている[26]」。そして「彼らの富はわれわれの通商の基本的要素を成している[27]」と露骨にいわれるところである。

外国人の来日が増加するにつれて、日本に深刻な動揺をもたらし、それが原因となって混乱が広まり遠からず、完全な改革へと進むことになるが、それは「異質な二つの社会がぶつかり合う時、この予期せぬ接触に苦しまねばならぬのは、文明度の低い方」なのである。「文明とは、憐みも、情もなく行動する抗し得ない力なのである。それは暴力的に押しつけられる力[28]」であるという、文字通りのパワー・ポリティクスを根底に置いている。

維新という時代は、正しく外国人にとっては「荒稼ぎ」の場であった。「実際のところこの、内戦の時代はキリスト教世界の津々浦々から雲霞のごとくやって来たあらゆる種類の山師連中が稼ぎに稼ぎまくった、いわば英雄時代（？）なのだ[29]」といわれるように、新たに生まれ変わるための苦しみとしての国内動乱も外国商人にとっての市場開放のための体制改革にすぎず、そして彼らの夢を果し得たのである。そのゆえに、荒稼ぎを目論むヨーロッパ人がしっかりと日本に住みつくさまが見られるが、「今後何事があっても彼らをこの肥沃な土地から追い出すことは出来ぬだろう。彼ら外国人は、文明と自分達の利害という名において、この国の産業開発を企てて来ているのだから[30]」である。これら外国人商人の頭にあることは唯一つである。「つまりお金をためるという考えである。そして彼らは富の追及に没頭して、退屈で疲れる生活に愚痴をこぼすこともなく忍従してい

る」[31]にすぎぬのである。しかも彼らの大部分は「シナや蘭領インドで持っていた大商店の出張所員」であった。そのかぎりでは「間違いのない人間、……危険な冒険家、詐欺師ではなかった」が、「肌の色についてする、あの人を傷つける虚栄心、……土着の人達を自分達より遙かに下位にあるものと見なす習慣を持っている」[32]といわれるような欠点を持ち合わせる者たちであった。

このような外国人に対して日本人が「丁寧に歓迎してくれるとしたら、大抵の場合、恐れの感情に屈している」[33]からにほかならない。

しかし在日外国人間の利益追及の競争が激しくなるにつれて、「商売はあまり儲からず、利益は少なく、ひと財産築きたい者には日本に来るのを勧めません。英国人が旨い汁をみんな横取りして、汲い上げてしまったのです」[34]という状況が生まれてくる。また、南北戦争の余波を受けて「商売は途轍もなく不振で、僅かな儲けすらありません。最近はどこもかしこも不景気ですが、この張本人はアメリカ人です」[35]といわれるように、すでに日本の経済は国際経済の枠組みの中に位置づけられて変動するものになっていることを示すとともに、日本の政治状況の安定が個々の外国人商人の「荒稼ぎ」を不可能にしつつあったといえよう。

すなわち、国内改革が進むにつれて、「明白なことは、ここ日本においても、中国と同じように、もはや黄金時代は過ぎ去り、思いがけない法外な利益など望めなくなっている、という事だ」。それというのも「欧米商人の殺到、新しい商社の設置、目に見えてますます激化する中国人同士の競争」[36]の故である。それでも日本と外国の直接貿易は着実に増加しているのである。しかし、かつて利益を独占していた英国商人の立場は弱体化しているところであり、「二年来、英国人の取引はひところよりふるわない」、「ドイツ人は中国人と並んで、英国の航海と商売のもっとも手強い競争相手となっている」[37]といわれるように、全体的に見るならば、競争相手の増加が英国商人の利益を分割しつつ、貿易総量を増加させていたということであり、ドイツと日本との関係を濃密にしつつあった事情を見ることができる。しかも英国商人はその競争相手の諸国からも厳しい目で見られていた。アングロ・サクソンは「支配者面をしてのさばっており、彼らの中のごく僅かしか感じ取ることの出来ない地方芸術など、彼らは少しも気にかけてはいない」[38]とその貪欲ぶりが批判されている。

六

一攫千金の夢は去り不景気が述べられるにしてもなお日本は、外国人商人にとってはうまい汁を吸い得る国であった。日本は「そんなに見捨てたものではありません。将来のために資金を稼ぐ所です」「ポンペは……かなりの金を蓄えたようです」「より収入を得る絶好のチャンスです」「三年間の日本に滞在することによって、トーンは小さな財産を手に入れることができます。……ある日ドクトル殿は、大判小判をポケットにぎっしり詰めて、あなたのもとに帰っていくでしょう。……要するにこの彼の旅立ちは、懐中を著しく潤沢にするためだ」[39]と、兄の来日をすすめると同時に、自分自身についても「日本が資金を稼ぐチャンスを与えてくれるだけで十分に満足している」と言い切れるだけのことはあったのである。このように自らの利益を確保し蓄財に言及する者が領事の地位にあったのである。つまり開国当初の外交の第一線は貿易商人、商社の活動する場であり、そ

のような在日商人が代理領事として任用されることも多く、「訴訟を担当する領事連中ときたら、日本政府はおろか、日本の企業を敵にまわしても勝訴することが、自国の民族的威信の勝利だとつねづね考えている」[40]者だといわれる。しかも、それは単に、民族的威信の問題であっただけではなく、それ以前に外交は個人的な競争心などに発することもあったのである。例えば、倒壊寸前の幕府をめぐって、フランス公使ロッシュが陸軍教官団を呼べば、イギリス公使パークスは海軍教官団を呼ぶといったことがあった。そのことは後に、パークスの部下であったミットフォードによって、「立派に成長した今日の陸軍と海軍の基礎が築かれたのは、イギリス公使とフランス公使の嫉妬心に起因しているとは誰も予測できなかったに違いない」[41]と回想されているところである。

しかし何れにしても、このような個人的なレヴェルでの競争心が正当化されたのも、彼らが代表する自国の商人たちが「日本にたいしきわめて重大な商業上の利害関心をもっていた」からであり、「ひたすら日本人を食い物にして私腹を肥やそうという魂胆で日本にやって来」、「海のかなたの『植民地』における文明事業の信用をはなはだ失墜させていた」のであり、彼らは「文明という名の略奪者」であり、「文明とは名ばかりの山師ども」[42]であったからである。このような外国商人の貪欲な荒稼ぎを守ったのは、自国領事の裁判権にのみ服することを定めた「治外法権」の存在であったことはいうまでもない。

しかしこのような「外国人商人の貪欲や猛々しい非妥協的振舞」[43]いについても、彼らが軍隊による保護もないままに現れたので、彼らの活動方法が時々とっぴに映ったとしても、また、商取引の中に導入される無数の障害によって説明がつくとして寛大に許されるのである。何れにしても、五カ国条約締結（一八五八年）直後、最初に来日したイギリスの商人たちは、「この日出ずる国に一旗揚げにやって来た。ヴィクトリア女王の公使ラザフォード・オルコック卿が、ヨーロッパ人に払い下げる土地について将軍と交渉している間に、当のヨーロッパ人たちはまったくの独断で、ほとんど人の住んでいない海岸を店と住居を建てる場所として選んだ」[44]のである。それが横浜の初まりである。

このようにして日本の経済を支配し始めたのは、芸術を鑑賞するよりも「鱒料理の値段を手帳の上で計算」するような「文明人達」であり、彼らは「日本人に法外な値段で、質の良くない鉄道や、運行不可能な船舶を売り付けることだけで満足せずに、彼らは風習をも牛耳り、……自分達の言葉を彼らに強要している」[45]のである。そしてひとたび商売不振に陥ると、『炎の清算』こそ極東のヨーロッパ租界でもっとも流行した取引（？）だった」。すなわちガラクタや空倉庫に放火をして保険金詐欺を企て「損害の勘定書を日本政府にたたきつける仕組になっていた」[46]と暴露されるところである。

このような横暴なふるまいは、同国人の外交官その他からも厳しく糾弾されるところであり、日本人商人と外国人商人との評価は実質的に逆転するところとなる。

「つねに英国人は横浜に渡来した外国人のうちで一番思慮に欠けています。この国の人たちと接する時にはさらに十倍も横暴にふるまうので、実際、英国商人に正しい礼儀作法を教えるために、日本人は彼らを叱りつけたほうがよいのです」[47]。

礼儀正しく、名誉のためとあらば死もいとわぬように教育されてきた日本人に対してヨーロッパ人は敬意を払わぬが、「それもそのはずで、……全体としてみると一攫千金の夢と日本の風俗、日本の住民へのいわれのない尊大な軽蔑心のほかには、懐中になにひとつ持たぬままこの新しい国へやってきた手合が大部分なのだから……」[48]。

「横浜のような東洋の貿易港に横行する大勢の西洋人ほど俗物のならず者連中」[49]は他に類を見ない。日本はいま「不幸のどん底に陥っていますが、それはみな少数のヨーロッパの貿易商人が富裕になるために生じた結果なのです。外国人が到来したことによってこの不幸な混乱が始まったという事実は、おおい隠すことができません」[50]。

「紳士のはるか下には無頼漢もいる」[51]。

七

外国人商人の日本人に対する態度についてはどうか。あるいはそのような横暴な行為は果して貿易商人の個々人の問題であったのであろうか。

絹産業のために日本の蚕卵紙を求めていたイタリア人の日本到来の目的は、第一にそのことに置かれてはいるが、さらに、「西洋諸国の工業製品にとっての広大な市場としてすでに開かれていた東アジアの諸国にイタリアの存在をしめすということだった。……わが国植民地経営のいちじるしい立ち遅れを、果断なる決意をもって克服すべき時が来た」[52]ということに置いている。その上で、一八五八年条約締結国も極東における「共通利害関係にあるために、ヨーロッパの新たな一国が自分らの外交政策に同調することを歓迎していたのである。これら諸国は、文明の力を行使して、可能な限り自己の権益を確保しようと努めていた」と述べ、欧米列強の共同による、日本での権益確保が進められていたことを示している。欧米列強が求めていたのは、「工業製品の余剰を日本および中国の豊富な物産と交換すること」であり、「その主張を貫徹するためには一致し、かつ強力でなければならない」ということである。しかも東洋人の統治に成功せぬ限り、東洋人は回教や仏教を信奉し、幾多の迷信を抱き続けるであろうし、そのような状況が続く間は「われわれの文明的法体系をそのまま彼らに適用することはできない」[53]として、日本の近代的社会の全制度の全面的採用を力によって押しつけようとしていることを示している。

外国人の日本人に対する態度はどうか。「日本の港に定住したドイツ人は、日本人の礼儀正しさとていねいさに対する軽蔑の気持をかくさない」[54]し、「日本人のこういう礼儀作法を人間のすることではない馬鹿げたものとして日本人の召使たちに禁じている」[55]ものもいたといわれる。また西欧の独身男性は日本女性と手軽に結婚して軽薄である。「在日外人の状態はひどいものである。この国に来ている若い人たちは不行跡で堕落していて、おとなしい日本人を何かにつけて侮辱している。既婚の商人たちは、この国の女の人たちをめかけとして家に置いている」[56]が、それは荒々しい水夫についても敬虔な宣教師についても同じだといえることである。そして、「私の魂は嫌悪の念をもって、これら堕落した外国人（私の祖国の人も幾人か含まれているのだが）に背き、日本人の中に見出される純粋なものの方にひかれてゆく」と述べて、後に勝海舟の庶子梅太郎と結婚した若きクララ・ホイットニーは、「今まで外人と日本人を比べて考えたことがなかったが、確かに我々は身体的に、そして多分知的にもまさっている。—し

かし東洋人は少くとも人前でとるべき態度をちゃんと心得ている」と考え、振舞いの悪い外国人を見るにつけて、「日本人のような礼儀正しい国民の中にそんなに長くおられるのだから、日本人の優雅さを少しは見習うべきだと思う」[57]のであった。「結婚と同様に、感動も涙もなく、離縁する」[58]ような、自堕落の生活は、またたく間に転落をもたらすこともある。「ほとんどすべてのヨーロッパ人は、この地ではじめこそあっというまに荒稼ぎするが、そのあとは『引き際』をわきまえぬ賭博者の宿命で、またたくまにすってんてんになってしまう」[59]ものも少なくなかったのである。

しかし、そのような商人たちにとって自分たちの行為がどのような反響、批判、憎悪を生み出しているかについては無関心である。「周囲の現実が彼らにたいし、不平不満を鳴らしていようがお構いなし、蚕の繭の相場で頭がいっぱいの彼らは、そうした不平不満に気づきさえしないのである。外来の商人にたいする日本武士の狂信的憎悪が、幾分寛容な蔑みへと移ってからというもの、とくにこうした状態がひどくなったといえる」[60]と述べられるように、彼らにとっての関心事はあくまでも「木綿と絹の価格」だけであったのである。

八

当時、日本に来航した定期船について。

(1)二週間毎にエンプレス・オブ・インディア号、エンプレス・オブ・チャイナ号、エンプレス・オブ・ジャパン号が横浜・神戸と上海・香港間に就航。

(2)一カ月に二回、サンフランシスコ、ハワイ経由で横浜へ。

(3)ヨーロッパからP&Oカンパニーの船が、また、月に一度ジェノバからノース・ジャーマンの船が就航しており、その運賃は一等一三〇〇マルク、二等七四〇マルク、快足汽船で約四〇日を要した。トリエステ―神戸間は二等四〇£スターリング、六五日。マルセーユ―横浜間は通常四五日を要した。[61]

また、一八六六、六七年頃の通信状況については、セイロンの小港プワント・ド・ガルがヨーロッパと電信が結ばれ、スエズから来る郵便船がここで電報を受取りシンガポールへ。電報はシンガポールで『海峡タイムス』の名で印刷され各地に配布された。横浜で受ける最新ニュースは「いつも三十日程遅れていた。それでも手紙や新聞によって得るニュースよりも、十四日早いことになる」が、それより早く情報を得るためには、「聖ペテルブルグからキャフタ（バイカル湖南のロシア町）に通じている電報」[62]があったが、ほとんど使われていなかった。

一八九三（明治二六）年当時、日本には約三千七百の郵便局があり、中央郵便局には英語を話せる職員が配置されていた。

一八九二（明治二五）年、英国から九万一千通の手紙と十五万通の印刷物が、ドイツから四万四千九百通の手紙と五万千二百通の印刷物が、ロシアから一万六千八百通と一万千七五〇通の印刷物が、そしてオーストリア・ハンガリーから四千三七〇通の手紙と三千二百通の印刷物が到着していた。[63]

在日外国人数。

一八六一（文久元）年　横浜居留外人136。[64]

一八六三（文久三）年　長崎居留英国人58、米国人34、オランダ人23。[65]

一八六四（元治元）年　総数300、内、英国人140、米国人80、オランダ人40、その他ドイツ・イタリア・フランス・ポルトガル人。長崎居留[66]39。

一八七一（明治四）年四月二九日（ハリ・パークスの報告）　英国人782、米国人229、ドイツ人164、フランス人158、オランダ87、その他ヨーロッパ人166、総計1,586。[67]

一八七二（明治五）年頃の江戸居留外人数、約250。[68]

一八八八（明治二一）年　外国人総数5,354、英国人1077、米国人507、ドイツ人299、フランス人210、その他西洋人346、西洋人計2439。[69]

一八九二（明治二五）年末　在留外国人数9803、シナ人5574、英国人1728、米国人958、ドイツ人480、フランス人404、ポルトガル人157、オランダ人91、ロシア人80、スイス人74、デンマーク人69、オーストリア人47、イタリア人39、スカンジナビア人24、ベルギー人20。[70]

一八六六（慶応二）年当時、最大の西洋人街を有した横浜には陸軍病院三、カトリック教会一、プロテスタント礼拝堂一、料理店数軒、割引銀行六、七行、新聞三（内一は風刺漫画入り）があった。一八六五年までの横浜は各国領事の管理下にあった。領事は必要に応じ日本側と協力したが、居留民の増加、市街の拡張に伴ない、個人の自由と選挙の原則により適合し、より統一された市政権、市警察が必要となった。一八六六年三月には民留民会の全員一致で「市政委員会」（委員数、英国十一、米国五、フラス四、オランダ、プロシア各二、ポルトガル、スイス各一）が設立され、自治的運営がなされるに至っていた。[71]

外国人の許留民数の増加もさりながら、日本観光の旅行者も増加していた。自らも世界一周旅行を行なって日本に立ち寄ったボヘミアの教育総監ヨセフ・コジェンスキーは、明治二六年頃日本に来航した観光客を、その所持金の額、職業、目的等によってグループ分けをしている。[72]

(1)普通の観光客。白い日除帽、青いめがね、手荷物は少なく、立ったカラー、暖い下着、「いくらか?」と聞き値切り交渉をするが、少かしか金を出そうとせぬ、街をブラブラし、退屈し、早く旅の終るのを待っている。

(2)勉強熱心な観光客。ノート、アルコール、エーテル、青酸カリ、捕蝶網、あき缶、ビン、吸取紙をもつ。

(3)品の良い観光客。大都市のみを訪問、そこの領事・大使が狩りや宴会に招待、高官の紹介状を有し、歓迎されぬがよい待遇を受ける。

(4)自主的な観光客。自分のヨットをもち、家族と一緒に旅行するが、主目的はミカドを訪問することにある。

(5)貴顕の観光客。通例は皇族の一員、大勢の伴をつれ軍艦で到着。日本の実業家はこのような賓客に会いたがり、新聞もこのような種類の訪問客に大きく紙面をさく。

(6)団体観光客。旅行案内業者がすべてを手配し、快適な旅行をする。ガイドの語ることに満足する。

(7)絶望的な観光客。世界の隈々にまで幸運を求めるが、日本においても見つけることはできない。

(8)愛想のよい観光客。よい物、公園、川、山を好む。歩くのが好きで余り話をせず、観察している。

以上のように多種類に分類されるほどに観光客も多く、彼らが帰国後に語る日本印象記が世界に定着して行くのであろう。今日においても牢固と

して抜けぬ、世界の教科書に描かれているといわれる「フジヤマ、ゲイシャ、リキシャ」等の日本像はこの頃から出来あがっていたといえよう。

この日本観光旅行に関しては、官庁による正式な許可が必要であり、通商条約により八つの開港場又は条約港には旅行免状（パスポート）なしに入港し得るが、その距離十里以内の範囲を旅行し得た。旅行免状の発行は容易ではあったが、申請書に記入された場所に限られ、有効期間は通常三カ月で、これがないと宿泊も汽車の切符の購入も不可能であった。旅行免状の所持についてはきわめて厳しかった。例えば、一八九一（明治二四）年五月十一日の大津事件（ロシア皇太子刺傷事件）に際して、明治天皇の侍医スクリバ博士がその治療のため随行を求められたが、旅行免状を持たぬ博士は「私は外国人ですから、陛下の御面前でも逮捕されます」と答えたほどのものであった。[73]

九

日本近代化の政策にとって重要なことは先進国の科学技術を取り入れ、殖産興業の育成発展を計ることにあり、そのための助言者あるいは相談役として招聘された技術者あるいは技術教師は「お雇い外国人」と称された。確かに彼らの果した業績は大きいものである。しかし、日本政府は、「必要な知識や技術を習得したと知ると、雇いのヨーロッパ人を解雇した」[74]と、外国人教師には不満が残るところであった。しかしその「お雇い外国人」のなかには契約を悪用して日本政府を困惑させた者も少なくない。

建築、土木工学の基礎学としての数学その他の科目を教授するため、一八七〇（明治三）年に設置された「修技校」（東京大学工学部の前身の一つ）に集った学生は、「高度の専門の学問を急速に習得しようと野心に燃えて」おり、「学業の進歩は驚異的なもの」があった。しかし、その早急にすべてを習得しようという意欲が原因となって、「生徒側から教師の熱意に対する不満が起りはじめ、遂に不満が噴出」[75]することも起る。それは外人教師の教室内外での態度に由るものである。例えばある外人教師は「教室にデッキチェアを入れさせ、パイプや葉巻をくゆらし、ブランデーを飲み飲み、生徒の復習を聞いていたという。東京の医科大学のマックブライドというスコットランド人も同じことをやり、その上授業中にスコットランド歌謡を口笛で吹くという。この人達は何と不作法なのだろう。日本人は外国人の事を一体どう思うだろう」[76]というのが、外人教師の何人かに見られた実態であるが、このような事が起るのも、日本側にも原因があってのことである。それは、必らずしも識見、人格に秀れた専門家を資格審査の上採用することが出来ず、自薦、他薦を含めて、推薦のあったものを採用せざるを得なかったことによるものである。それは一方で、「専門など問題ではなかった。どのヨーロッパ人も、この遠い日本では、必要とあらば司令官にも教師にも、技師にも医者にも、砲術家にも財政家にもなれる、とまともに思っていた」外国人が存し、他方で、日本人からすれば「ヨーロッパ人と名のつくものは、百科全書家と同義語」であると考える日本の実情があったことである。いうならば当初から日本人は「ヨーロッパ人ならば誰れかれかまわず、まだ見ぬ世界の代表者と受けとったものである。誰れもがヨーロッパから何かを学ぼうと必死」[77]であったからに他ならない。従って、機械技師か医者の仕事を頼まれて断った場合、それは能力や専門の問題から断ったものではなく、「俸給額が足りないからに相違

ない」と考えるのが日本側の受け止めかたであったのである。

「有能な専門家が少なからず見られたものの、それでも専門にふさわしい職務についている事例はまれで」[78]あり、極端な場合には、外国語学校の露語科には「ロシア語を知らぬロシア語教師」[79]がいたが、ドイツ語の方がましだったのでドイツ科に配転されたりしている。日本の近代化の強力な推進力としてヨーロッパ式の教育機関の設置が計画され、その一つとして設立された「外国語学校」（明治六年、東京外国語学校の前身）に期待されたことは、ヨーロッパ語さえ習得すれば、「これらの言語で行なわれる大学の講義を十分聴きとれるはずだ」[80]ということであった。そして、第一に外交およびその他の公用にあたるべき主要ヨーロッパ語の通訳の一定のスタッフの養成、第二に大学でヨーロッパの英知を身につけ、しかるのち日本の学校でそれらの英知の普及者となる一定数の学生を養成すること、が求められたのである。そこには「文学的知識と実証的知識のあいだにあるような根本的相異など、まるで頭になかったよう」[81]であり、学校の設置はまことに安易に考えられており、しかも「履習要綱などもまったくできておらず、校則のたぐいもまさに朝令暮改にひとしかった」[82]のである。

また、これに対し、外人教師と契約に際して「学者なるものに深い尊敬をはら」う習慣の日本側は、「契約書に、法律上のこみいった駆引きや形式主義を盛りこむことなど当初は思ってもみなかった」ので、外国人教師のある者たちは「契約の不備を悪用」して、出講しなかったり、免職になるようにしむけ、免職ともなれば民事訴訟を起し、俸給の一括支払いを求めたりし、外国人教師の募集があれば再度応募し、同じことを繰り返えしたりもしたのである。

このような悪質な外人教師の横行は、「高額な給料、彼らとの生活慣習の相異、外国人の非行に対して懲罰の権力がないこと等々、……実際にはあまり役に立たないばかりか、非常に扱い難い存在になった。勝手に職場を放棄したり、政府の命令に従わなかったり、また職務の怠慢や泥酔その他の非行が、……頻々と起って政府の悩みの種」[83]となっていたのである。このような状況は、当時、唯一の大学ではあったが、未だなお十分に整備されていない東京大学の「教授陣のなかには何人かの著名な欧米の学者もまじってはいるが、この大学の最大の悩みは、講義の水準をいっこうに平均化できない」[84]といわれるように不適任者も多かったということである。しかしある意味ではこのような時期があったればこそ、「今までヨーロッパ人の教授が占めていた地位を今度は日本人で充当するという必要性、あるいは新しい教官の椅子が用意されるというような見込みが生ずる」と、次第に教師の差しかえが行なわれ、日本独特の教授スタイルが生まれるに至ったのである。すなわち、そのことを遂行するために、「専門領域を極めるために三年間ヨーロッパ（たいていドイツ）に留学を命ぜられた」。大学の教職に就くと大抵の場合、日本におけるその分野での唯一の専門家である。「自己の知識の欠落を熱心な勉強で補い、山なす素材を留学で学んだ方法で処理し、論文にまとめようとする」学者の研究スタイルが出来あがるが、そのような方法に従うかぎり、「まことに偏った専門家になってしまうために、人生を自由にとらわれのない目で観察したり、精神的高揚を感じたり、時代生活全体に生き生きとした関心をもつということがなくなり」、「自己の職務に関する事柄、社会的義務、それにしばしば政治論議ぐらいしか、かれらの視野には入ってこない」ような極めて閉鎖的な教育

官僚が出来あがり、「結局は全体への明確な展望と独自の思想を構築する気概とを失ってしまう」と批判される方途へと進み、現在の姿を先取りした見解が示されている。

以上に見られるような、明治初期までに来日した外国人の振舞いや態度は、強大な軍事力を背景にしての開国＝市場開放の中で、中国その他の地域で培われたものであったであろうし、また、日本側にも国際経済市場での動き等に無知であったし、何よりも列強の力に圧倒されているという事実があり、当面、そのような振舞いを許したところである。その典型的な例は、金の大量の国外流失である。世界水準から見たときの日本の金、銀の交換比率は一対三と高価格であった為、安い銀が持ちこまれたことによるもので、国際的経済事情の無知のもたらした結果であった。しかし、このような一部の商人の行為に対して反省も起ってくるところである。「我々が間違って押し付けて来た、そしてひどく日本人を傷つけている条約の廃棄の件については、日本人を信用してやろうではないか。貿易商達が互いにうまくやっていけるようにしておこうじゃないか。それが貿易というものがみんなに利益をもたらす唯一の手段」[86]ではないか、というように、貿易も長期にわたって安定し、日欧双方に利益のあるべきものになることが期待されるに至る。後にオランダ領事となった商人ボードウァンも、当初は全く日本および日本人を気嫌いしていたが、滞在年数が長くなるにつれて、次第に異文化としての日本を研究し始めるのである。

対日理解に変化が起ってくるのは、前に引用した人々全てに共通している。彼らが記録するのは、当初、物めづらしいこと（人力車、駕籠、車夫、漁師の文身や裸体、建築、入浴好き等）についてのみであり、そこから表層的な道徳観、価値観の相異を述べるのに終っている。しかし、異文化としての日本を理解しようとするとき、日本の特殊性は何かを考え始める。そのために、日本の歴史の分析を行なうとともに、日本文化を形成する重要な要因としての宗教と日本人の宗教に対する曖昧な態度に着目する。そして建築、芸術を通して、日本人の美的感覚と自然との関わりを見て、より根源的な自然観の理解へと議論を進める者も出て来る。そして更には開国後の日本の変化にも言及し、今日的にいうならば近代化論を一般的に考えたりもするのである。

例えば、開国以来の西洋の科学・技術の導入については、単なる模倣と器用さが指適されるだけである。長崎の海岸に設置されていた灯台の灯室には反射鏡のような照射装置はなく、かえって障子で囲ってあった。その理由は外人宅のランプがすりガラスでおおわれているのを見、それが光を強くすると判断したが、ガラスが手に入らぬので、薄紙で代用したというのである。「日本人の奇妙な工夫の才」「ヨーロッパ人が要求する科学的方法が、ときとして日本人にこのような奇妙な間違をさせることがある」[87]と述べられる状況が日本の実情である。このような実情の中で行なわれる西欧の制度文物の模倣、輸入が欧化主義の実態である。たしかに日本は「すべての文明国からその最善の物を模倣」[88]して、次第に「西側世界のやり方や発明が日本に根づいた」[89]といわれるが、「新しい宗教は入って来なかった」といわれるように、単なる模倣ではなく、受容には選別が行われている。それに関連していわれることは「ヨーロッパの方法がよく研究され、よく理解されており、日本的な巧みさと器用さによって和らげられ洗練された形で適用」され、「彼らの中に、日本の形式にうまく調和させた西洋

的な思想が見られる」に至っており、「この国民は、模倣することにはもはや満足していないで、やり方を変え始めている」[90]ということである。

＝未完＝

注

(1)『東アジア地域の経済発展とその文化的背景』日本経済調査協議会監修、第一法規、一九八九年
(2)『イタリア外交官の明治維新』アレクサンダー・ヒュープナー（市川慎一・松本雅弘訳）新人物往来社　昭和六三年　一四一頁
(3)『日本論』載季陶（市川宏訳）社会思想社　昭和五八年　四五頁以下
(4)『薩摩国滞在記―宣教師の見た明治の日本―』H・B・シュワルツ（島津及大・長岡祥三訳）新人物往来社　昭和五九年　一七五頁以下
(5)『明治旅行案内』チェンバレン（楠家重敏訳）新人物往来社　昭和六三年　二九頁
(6)『一外交官の見た明治維新』アーネスト・サトウ（頁田精一訳）岩波書店　昭和三五年　下巻六
(7)同前　十三頁
(8)同前　上十三頁
(9)同前　上十三頁
(10)同前　上二〇頁以下
(11)『フランス人の幕末明治観』モンブラン（森本英雄訳）新人物往来社　昭和六二年　十一頁以下
(12)『ドイツ宣教師の見た明治社会』カール・ムンチンガー（生熊文訳）新人物往来社　昭和六二年　六三頁以下
(13)同前　八八頁以下
(14)『明治滞在日記』A・ベルソール（大久保昭男訳）新人物往来社　昭和六四年　七一頁
(15)『ドイツ宣教師の見た明治社会』九〇頁
(16)同前　九二頁
(17)『スイス領事の見た幕末日本』ルドルフ・リンダウ（森本英夫訳）新人物往来社　昭和六一年　一七六頁以下
(18)『オランダ領事の幕末維新』A・ボードウァン（フォス・美弥子訳）新人物往来社　昭和六二年　四一頁
(19)『フランス士官の下関海戦記』ルサン（樋口裕一訳）新人物往来社　昭和六二年　四七頁
(20)同前　序
(21)『ウェストンの明治見聞記』ウェストン（長岡祥三訳）新人物往来社　昭和六二年　五五頁以下
(22)『スイス領事の見た幕末日本』十四頁
(23)同前　十七頁
(24)『イタリア使節の幕末見聞記』アルミニョン（大久保昭夫訳）新人物往来社　昭和六二年　一六〇頁
(25)『イタリア外交官の明治維新』十頁
(26)『スイス領事の見た幕末日本』十四頁
(27)同前　十六頁
(28)同前　十六頁
(29)『回想の明治維新』メーチニコフ（渡辺雅司訳）岩波書店　昭和六二年　一九一頁
(30)『スイス領事の見た幕末日本』三三頁
(31)同前　四一頁
(32)同前　一〇四頁
(33)同前　三四頁
(34)『オランダ領事の幕末維新』四〇頁
(35)同前　七〇頁
(36)『イタリア外交官の明治維新』十五頁
(37)同前　十七頁
(38)『フランス人の幕末明治観』九〇頁
(39)『オランダ領事の幕末維新』七〇頁以下
(40)『回想の明治維新』二七八頁
(41)『英国外交官の見た幕末維新』ミットフォード（長岡祥三訳）新人物往来社　昭和六〇年十五頁

(42)『亡命ロシア人の見た明治維新』レフ・イリイッチ・メーチニコフ（渡辺雅司訳）講談社　昭和五七年　二七頁以下
(43)『ドイツ公使の見た明治維新』M・ブラント（原潔、永岡敦訳）新人物往来社　昭和六二年　四六頁
(44)『イタリア外交官の明治維新』十三頁
(45)『フランス人の幕末明治観』九〇頁
(46)『回想の明治維新』一九五頁
(47)『ある英国外交官の明治維新』ヒュー・コータッツイ（中須賀哲郎訳）中央公論社　昭和六一年　三九頁
(48)『回想の明治維新』九三頁
(49)『ある英国外交官の明治維新』四〇頁
(50)同前　九九頁
(51)『イタリア外交官の明治維新』二三頁
(52)『イタリア使節の幕末見聞記』十頁
(53)同前　二一頁
(54)『明治のジャポンスコ』ヨセフ・コジェンスキー（鈴木文彦訳）サイマル出版会　昭和六十年　四八頁
(55)『イタリア外交官の明治維新』五八頁
(56)『クララの明治日記・上』クララ・ホイットニー（一又民子訳）講談社　昭和五一年　三〇頁
(57)同前　二〇頁
(58)『フランス人の幕末明治観』一九一頁
(59)『回想の明治維新』九五頁
(60)『亡命ロシア人の見た明治維新』一一二頁
(61)『回想の明治維新』三〇頁
(62)『江戸幕府滞在記』E・スエンソン（長島要一訳）新人物往来社　平成元年　十五頁
(63)『明治のジャポンスコ』二二頁
(64)『イタリア使節の幕末見聞記』五二頁
(65)『オランダ領事の幕末維新』一〇二頁
(66)『イタリア使節の幕末見聞記』五二頁
(67)『イタリア外交官の明治維新』二四頁
(68)『回想の明治維新』一九五頁
(69)『フランス人の幕末明治観』一九三頁
(70)『明治のジャポンスコ』二三頁
(71)『イタリア使節の幕末見聞記』五二頁以下
(72)『明治のジャポンスコ』九頁以下
(73)同前　十六頁
(74)『お雇い外国人の見た近代日本』リチャード・H・ブラントン（徳力真太郎訳）講談社　昭和六一年　七五頁以下
(75)同前　一一五頁以下
(76)『クララの明治日記・下』一六三頁
(77)同前　二六七頁
(78)『回想の明治維新』一九二頁
(79)同前　二八四頁
(80)同前　二七一頁
(81)同前　同頁
(82)同前　二七六頁
(83)『お雇い外国人の見た近代日本』一六八頁
(84)『回想の明治維新』二八九頁
(85)『ドイツ歴史学者の天皇国家観』ルートヴィッヒ・リース（原潔、小岡敦訳）新人物往来社　昭和六三年　一二二頁以下
(86)『フランス人の幕末明治観』一九三頁
(87)『お雇い外国人の見た近代日本』四六頁
(88)『薩摩国滞在記』一六〇頁
(89)『明治のジャポンスコ』一四〇頁
(90)『明治滞在日記』七三頁